看護実践学会誌　Journal of Society of Nursing Practice, Vol.35, No.1, pp.82～90, 2023

原　　著

子育て中の母親のグループによる被サポート感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

Development and Reliability and Validity Testing of a Subjective Sense of Group Support Scale for Mothers Raising Children

金谷　雅代，西村　真実子

Masayo Kanaya，Mamiko Nishimura

石川県立看護大学

Ishikawa Prefectural Nursing University

キーワード
グループ，サポート，子育て

Key words
group，support，raising children

要　旨

本研究の目的は、子育て中の母親が参加しているグループにおいて、母親がグループメンバーからサポートが得られているかを明らかにするために、「グループによる被サポート感尺度」を作成し、信頼性・妥当性を検討することである。

７下位尺度を想定し、30項目からなる尺度原案を作成した。内容妥当性の検討後、グループ活動を行う子育て中の母親272人に対し、無記名自記式質問紙調査を行った。168人の有効回答を得、項目分析、探索的因子分析を行い、構成概念妥当性を確認した。尺度のクロンバックα係数を算出し、内的整合性を確認した。検討の結果、３下位尺度22項目の尺度となった。『グループメンバーへの安心と信頼』は11項目で構成され、α＝.95、『自己の内面の伝達可能性』は６項目からなり、α＝.90、『被受容による人間関係への自信』は５項目で構成され、α＝.88と高い信頼性係数を得た。

今回作成した３下位尺度22項目からなる「グループによる被サポート感尺度」は、子育て中の母親グループの評価として活用可能性がある。

連絡先：金谷　雅代
石川県立看護大学
〒929-1210　石川県かほく市学園台１丁目１番地

Abstract

This study aimed to develop and test the reliability and validity of a scale for a subjective sense of group support, which can be used to indicate whether mothers receive sufficient support from the other members of mothers' groups of which they are a part.

A preliminary scale of 30 items was developed, assuming seven subscales. After content validity was tested, an anonymous, self-administered questionnaire survey was conducted among 272 mothers raising children who participated in group activities. In total, 168 valid responses were collected. An item analysis and exploratory factor analysis successfully verified construct validity; Cronbach's α coefficient was calculated, and the internal consistency was successfully verified.

The analyses results yielded a scale that included 22 items and three subscales. These subscales were "peace of mind and trust in other group members," with 11 items (α = 0.95); "ability to communicate one's own internal feelings," with six items (α = 0.90); and "confidence in interpersonal relationships because of being accepted," including five items (α = 0.88). Each subscale had a high reliability coefficient.

The Subjective Sense of Group Support Scale developed herein was confirmed as reliable and valid; it can be used to evaluate groups among mothers raising children.

はじめに

現代の子育て状況について、少子化、核家族化、都市化等に伴い、家庭の養育力の低下や子育て家庭の地域からの孤立などの問題が指摘されてきた。地域における交流が減少し、保護者を支える地域の子育て支援力も低下している。このような現代の子育てをめぐる状況を踏まえ、これまで法整備がすすみ、様々な子育て支援サービスが主に少子化対策に位置づけられ展開されてきた[1)]。

育児不安や困難感を軽減するための課題として、きめ細かな支援等子育て支援サービスの質的向上が望まれ、個別支援とともにグループケアの必要性、重要性が言われるようになり、多くのグループの試みやその効果が報告されている。母親のグループケアとは、子育てや虐待などに悩む母親が集まり、話し合う中で、仲間作りができ、思いを分かち合い、悩みの解決につながっていく性質を持つ。様々な名称で支援がなされている。グループの試みとして、中板により育児不安や育児困難を抱える親を対象としたグループ活動が紹介されている。育児不安や育児困難を抱える親のグループ活動では、自分の傷つき体験や現在の問題を語り、分かち合って互いにサポートを得ることで、今まで抑え込んでいた感情を整理し、心にゆとりと成長がもたらされるとの結果を得ている。また、親子の関係を見つめなおす機会となったり、自分の周囲の人との関係も振り返ることができるようになったという結果を得ている[2)]。石川は子育て当事者によるセルフヘルプ・グループの特徴とその働きについて言及している。妊娠・出産や子育てという同じ体験を通じて、共感的な理解を基礎にしたグループメンバーの自発的な参加と継続的な活動から生まれる仲間（ピア）の相互関係によって、互いに支えあうグループの仕組みが最も重視される。子育て当事者によるセルフヘルプ・グループの働きは、常に対等で開かれた関係によるコミュニケーションやコミットメントによってメンバー間の信頼関係や相互支援の関係がより強固のものとなる[3)]、としている。また、小長井は、子育てピアが単に母親たちの仲間を作り出し、子育て支援に効果的ということのみならず、この中で、仲間としての関係の中で支えあいながら互いの努力で問題解決を図るような方法をとることで母親自身が自らの力を引き出し、活力を生み出したとしている[4)]。前原らは、開発した育児支援プログラムの効果として、参加者同士で子育ての体験や工夫を共有するようになったことや、近隣の子育てサークル等への参加を誘い合うようになり、プログラム以外の場にも持続し得るピアサポート形成が認められたことを報告している[5)]。清水らは少人数参加型プログラムの評価として心理学的指標や生理学的指標での評価を行っている[6)]。しかし、いずれもグループに対しての母親の評価を量的に示したものはみられていない。

グループで実施する親支援プログラムとして、ノーバディズパーフェクトプログラムがある。このペアレンティング・プログラムの短期効果についての研究報告がある。この研究では、母親の精

神的健康度と自己評価、育児不安感の変化を効果指標として取り上げ、検討しており、実施前と実施後を比較して、効果があったことが示されている[7]。また、マザーグループの効果を、MCG効果尺度（MCG：Mother and Child Group，母と子の関係を考える会）を用いて明らかにした調査がある。このMCG効果尺度の中に、グループ参加による直接効果として、「共感・受容・孤独感」、「対処（自己表現、他者への信頼）」、「グループの必要性（居場所）」をあげ、評価していた[8]。しかし、この研究では、MCG評価尺度は参加者と援助者、援助者間での効果の確認と共有に用いられており、グループに対する母親の評価は行われていない。

以上のように、参加者個々の心理や行動の変化を評価指標としてグループの効果を明らかにしているものは多いが、母親がグループにおいて、グループメンバーからサポートを得られているかを評価するという視点で調査されたものは見あたらなかった。そこで、本研究では、子育て中の母親のグループの効果をグループメンバーから得られるサポートの視点から明らかにする尺度を作成したいと考えた。参加者からグループに対する評価ができれば、支援者としてのグループへの介入の改善点を見出すことができ、グループの効果を高めることにつなげることができる。

よって、本研究は、子育て中の母親が参加しているグループにおいて、グループメンバーからサポートが得られているかを明らかにするために、「グループによる被サポート感尺度」を作成し、信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

用語の定義

本研究ではグループを、「子育て」を共通点に、定期的なサークル活動やペアレンティング・プログラムで活動を共にする人の集まりと定義した。サークル活動に子育て広場を利用していることや、ペアレンティング・プログラムへの参加経験者となるため、乳幼児をもつ母親のグループである。また、被サポート感はグループのメンバーに支えられ、力づけられていると感じることとする。

研究方法

１．グループによる被サポート感尺度の作成

グループに参加する母親にとってのグループメンバーによりサポートされたと感じられた時に得られる成果を表す概念については、Yalomの「集団精神療法で効果をもたらす因子」を基盤とした。

Yalomの「集団精神療法で効果をもたらす因子」として普遍性や愛他主義、カタルシス、凝集性など10の項目が挙げられている[9]。この因子の内容を基に、７下位尺度30項目の尺度を作成した。７つの下位尺度の定義を次のようにした。①被受容感は、自分がグループメンバーに受け入れられていると感じることができることである。Yalomの因子の凝集性の要素に相当すると考えた。②安心感・信頼感は、グループメンバーに対する感情である。Yalomの言う普遍性に相当すると考え設定した。③対人的魅力（交流願望）は、相手に対してひきつけられる力を感じることである。Yalomの示した因子のうち、凝集性の要素がもつ、グループやグループメンバーに対して抱いている対人的魅力を表す。④内面が伝達できることは、自己の中にある感情を表現できることである。Yalomの因子のカタルシスがこれに相当する。⑤人間関係についての自信は、社会やグループにおける人とのつき合いに対する能力を確信することである。Yalomの因子では対人学習の成果と考えた。⑥自己理解（自分の長所に気づく等）は、自分自身について分かることであり、Yalomの示した因子のうち、凝集性の中の要素と考えた。⑦被理解は、グループメンバーに理解されること、とした。これらを作成したのは、受容されることや理解されることにより、人間関係への自信が持てるようになり、また、受容されることや理解されることは安心・信頼につながると考えたためである。また、安心・信頼ができるメンバーには自己の内面が伝達できるようになり、安心できる環境では自己を見つめることも可能となる。そして、安心・信頼感をもてば、相手に対する対人的魅力を感じることができ、メンバーとの繋がりがより強くなると考えたからである。

次に、これらの下位概念を尋ねるための質問を30項目設定した。項目の作成にあたって、グループ活動において、グループメンバーによりサポートされたと感じられたときに得られる成果を考えた。また、グループの凝集性はメンバーがそのグループや他のメンバーに対して抱いている魅力に起因するというYalomの主張に則り、対人魅力を検討している研究を項目選定の参考にした[10]。グループやグループメンバーについての考えを問い、回答は「全くそう思わない：１」から「非常にそう思う：７」までの７段階のリッカートスケールとした。

２．内容妥当性の検討

グループによる被サポート感尺度の内容妥当性の検討は、育児不安や育児困難・虐待に悩む母親への支援の実践経験または専門的見識が豊富な研究者８人に対し、尺度の各項目が７下位尺度のどれに属すると思うかを選択してもらい、項目の文章がそれぞれに位置づけられている下位尺度の概念を正確に表わしているかをみることにより行った。

３．尺度の信頼性・妥当性の検討

１）対象者と調査期間

尺度開発には１項目あたり５～10のサンプルが必要であり、今回は30項目を設定したため150～300の対象が必要であった。０～５歳の乳幼児の母親で、定期的にサークル活動に参加している母親と、グループ支援としてのペアレンティング・プログラムへの参加経験がある母親計272人とした。ペアレンティング・プログラムへの参加者はプログラムの実施期間すべてに参加した人とし、プログラムの途中から参加していない人は除外した。調査期間は2009年７月～８月であった。

２）調査方法

無記名自記式質問紙調査を行った。サークル活動を行っている母親への調査は、A市子育て支援課長より調査許可を得た。市の子育て支援センターにおいて、サークルリーダーに対して研究の目的等を説明し、サークル活動時に調査用紙を配布してもらうこととした。また、自治体が運営する子育て支援機関を通し、サークルの代表に対して調査用紙を郵送し、メンバーへの配布を依頼した。サークルの選定は、自治体にサークルとして登録されている団体で、定期的な活動を実施しているものとし、担当者に一任した。ペアレンティング・プログラムを終了した母親へは、プログラムを実施したファシリテーターの許可を得て、調査概要を記載した説明用紙を同封した上で調査用紙を郵送した。調査用紙は郵送にて回収した。

３）調査内容

母親の属性として年齢、就業状態、子どもの人数を尋ねた。また、作成した「グループによる被サポート感尺度」の30項目は、「全くそう思わない：１」、「そう思わない：２」、「あまりそう思わない：３」、「どちらともいえない：４」、「少しそう思う：５」、「そう思う：６」、「非常にそう思う：７」の７段階リッカート法での回答を求めた。

４）分析方法

⑴　項目分析

天井効果、床効果を確認した。また、項目間相関を確認し、.80以上を示す場合、どちらか一方を削除対象とした。また、修正済み項目合計相関を確認した。

⑵　グループによる被サポート感尺度の妥当性の検討

得られた回答の探索的因子分析を行い、構成概念妥当性を検討した。また、サークル活動に参加している子育て中の母親とペアレンティング・プログラムを終了した母親では、グループメンバーからの被サポート感に違いがあるのではないかと仮説を立て、既知集団妥当性を検討した。

⑶　グループによる被サポート感尺度の信頼性の検討

抽出された因子ごとにクロンバックのα係数を算出し、内的整合性を検討した。

⑷　既知集団妥当性の検討

自主的にサークル活動で集まる母親のグループと、計画されたペアレンティング・プログラム参加者の間での比較を行った。

統計学的分析には、IBM®　SPSS Statistics 24 for Windowsを用いた。

４．倫理的配慮

調査への協力は自由意思であること、調査への協力がない場合も不利益がないこと、無記名の質問紙調査であり匿名性が保たれること、データは統計的に処理され、個人が特定できないように配慮すること、結果を公表したいこと、その際には、個人が特定できないようにすること、データは研究者のみが扱い、管理を厳重に行うことなどを研究依頼書に記載したうえで、サークルリーダーへ説明して渡す、または調査用紙とともに郵送した。内容妥当性の検討においては対象の研究者に、調査概要とともに口頭で説明し依頼した。調査用紙の回答・送付をもって同意を得たものとした。
本研究は、石川県立看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：看大第155－４号）。

結　　果

１．グループによる被サポート感尺度の内容妥当性の検討（表１）

母親への支援の専門的見識が豊富な専門家に依頼し、回答があったのは５人（回答率62.5％）であった。各項目が下位尺度のどこに位置付けられるかを選んでもらった結果、22項目は３人以上（一致率60％）が当初配置した下位尺度と同じ下位尺度を選択し、残りの８項目は下位尺度の選択にば

らつきが見られた。しかし、項目の文章がそれぞれに位置づけられている下位尺度の概念として妥当かどうかについての反対意見はなかったため、全項目を分析対象とし、因子分析の結果で項目配置の整合性・妥当性を検討することとした。全30項目と下位概念選択一致率、因子分析後に配置された下位概念について、表１に示す。

２．グループによる被サポート感尺度の構成概念妥当性、信頼性の検討

グループ活動を行っている母親272人中170人より回答が得られ、回収率は62.5％であった。このうち、グループによる被サポート感尺度に記載漏れのない、有効回答168人（有効回答率98.8％）について分析を行った。

１）対象者の属性

168人の母親の平均年齢は33.9±4.6歳、範囲は22～46歳であった。有職者は41人（24.4％）であり、本調査の対象は仕事をしていない人が多かった。子どもの人数は、１人が63人（37.5％）、２人が74人（44.0％）、３人が28人（16.7％）、４人が３

表１　子育て中の母親のグループによる被サポート感尺度　内容妥当性の検討結果と因子分析後の因子配置

下位尺度番号		項　　目	下位概念選択一致率（%）	因子分析後に配置された下位概念
①被受容感	7	グループの人たちは、私の言うことを受け入れてくれると思います	100	第３因子
	8	私はグループの人と関わると助けられます	40	第１因子
	14	メンバーと一緒にいると、参加することを歓迎されていると思います	100	第３因子
	22	グループの人たちは、私に関心をもってくれると思います	40	除外
②安心感・信頼感	18	私はグループの人と関わるとリラックスできます	100	除外
	20	私はグループの人と関わると安心できます	100	除外
	25	メンバーには安心して頼みごとができます	60	第２因子
	29	グループに参加することによって、批判されたり、評価されたりなど、傷つけられることはありません	100	第１因子
	30	私はグループの人を信じています	80	第１因子
③対人的な魅力	3	私はグループの人と関わることが楽しいです	80	除外
	10	メンバーは私にとって理想的な人が多いです(R)	80	第１因子
	12	メンバーと一緒に子育てに関する話し合いをしたいと思います	40	第１因子
	13	グループの人から離れたくないと思います	60	第２因子
	15	私はグループの人が好きです	60	第１因子
	17	私はグループの活動に満足しています	20	除外
	21	グループに参加すると、必要な情報がもらえます	40	第１因子
	26	メンバーと一緒に食事に行きたいと思います	100	第２因子
	28	メンバーと一緒に興味に関することをしたいです	80	第２因子
④内面が伝達できること	1	メンバーに、私の内面の不安や緊張を聴いてもらうことがあります	80	第２因子
	4	メンバーに、自分の気持ちを伝えるのが好きです	100	除外
	16	グループの中で話し合うときは、自分の考えを正直に言います	100	第１因子
	24	メンバーに、心の奥底を話せます	100	第２因子
	27	メンバーに、私の内面のもろさを伝えることができます	100	除外
⑤人間関係についての自信	2	社会のいろいろな状況で、うまくやっていける自信があります	100	第３因子
	6	ほとんどの場合、私はメンバーとうまくやっていけます	100	第３因子
	9	メンバーと何かするときは大体いつも協調的です	20	除外
	19	メンバーとのつきあいで、自分をうまくコントロールすることができます	80	第３因子
⑥自己理解	5	グループに参加すると、ポジティブな気持ちになれます	20	第１因子
	23	グループに参加すると、気づきを与えてもらえます	100	第１因子
⑦被理解	11	メンバーは私の気持ちをわかってくれると思います	20	第１因子

注）①～⑦はYalom の「集団精神療法で効果をもたらす因子」を元に設定した下位尺度である。（R）は逆転項目。

人（1.8%）となり、子ども２人の人が最も多かった。

２）内容妥当性の結果：項目分析

グループによる被サポート感尺度の30項目のうち、天井効果を認めた１項目「３私はグループの人とかかわることが楽しいです」を除外した。また、項目間相関の高かった２項目を除外した。「20私はグループの人と関わると安心できます」は項目５、18との相関係数が.80を超えていたことから、除外した。「27メンバーに私の内面のもろさを伝えることができます」についても項目24との相関係数が高く、除外した。

３）構成概念妥当性の結果

⑴　探索的因子分析（表２）

項目分析により３項目を削除し、27項目を用いて探索的因子分析を行った。因子の抽出方法は最尤法を用いた。因子数は、固有値が１以上の基準を設け、スクリープロットを確認し、因子の解釈可能性を考慮して３因子とした。因子の回転は、因子間の相関を確認するためプロマックス回転で行い、相関が確認できたため、プロマックス回転法を採用した。各項目のうち、因子負荷量が0.40に満たなかった３項目（17, 18, 22）を除外した。また、因子負荷量高値が複数に渡る２項目（４，９）を除外し、最終的に22項目となった。

第１因子は、「23グループに参加すると気づきを与えてもらえます」「８グループの人と関わると助けられます」「11メンバーは私の気持ちを分かってくれます」などの項目に因子負荷量が高く、グループメンバーに対する安心や信頼と、それがもたらすエンパワメントや自分・子育てについての気づきなどの効果を表していると考え、『グループメンバーへの安心と信頼』とした。第２因子は、「25メンバーには安心して頼みごとができます」

表２　子育て中の母親のグループによる被サポート感尺度　構成概念妥当性・信頼性の分析結果

		第１因子	第２因子	第３因子
第１因子　グループメンバーへの安心と信頼　Cronbach's α = .945				
23	グループに参加すると気づきを与えてもらえます	**.914**	.111	–.176
15	私はグループの人が好きです	**.904**	–.015	–.003
12	メンバーと一緒に子育てに関する話し合いをしたいと思います	**.762**	.244	–.157
21	グループに参加すると必要な情報がもらえます	**.761**	.049	–.094
08	私はグループの人と関わると助けられます	**.670**	.191	.060
16	グループの中で話し合うときは、自分の考えを正直に言います	**.658**	.047	.064
30	私はグループの人を信じています	**.657**	–.067	.234
05	グループに参加すると、ポジティブな気持ちになれます	**.572**	.144	.282
11	メンバーは私の気持ちをわかってくれると思います	**.536**	.060	.310
10	メンバーは私にとって理想的な人が多いです（R）	**–.473**	–.182	.038
29	グループに参加することによって、批判されたり、評価されたりなど、傷つけられることはありません	**.445**	–.162	.423
第２因子　自己の内面の伝達可能性　Cronbach's α = .900				
25	メンバーには安心して頼みごとができます	–.091	**.807**	.146
26	メンバーと一緒に食事に行きたいと思います	.168	**.722**	–.037
24	メンバーに、心の奥底を話せます	.152	**.695**	–.166
01	メンバーに、私の内面の不安や緊張を聴いてもらうことがあります	.098	**.641**	.031
13	グループの人から離れたくないと思います	–.029	**.638**	.211
28	メンバーと一緒に興味に関することをしたいです	.294	**.543**	.030
第３因子　被受容による人間関係への自信　Cronbach's α = .878				
06	ほとんどの場合、私はメンバーとうまくやっていけます	.077	–.001	**.840**
02	社会のいろいろな状況で、うまくやっていける自信があります	–.209	–.048	**.751**
07	グループの人たちは、私の言うことを受け入れてくれると思います	.252	.021	**.659**
19	メンバーとのつきあいで、自分をうまくコントロールすることができます	–.062	.205	**.624**
14	メンバーと一緒にいると、参加することを歓迎されていると思います	.234	.206	**.482**
	因子間相関		.790	.761
				.700

注）（R）は逆転項目。

「24メンバーに心の奥底を話せます」「１メンバーに私の内面の不安や緊張を聴いてもらうことがあります」などの項目に因子負荷量が高く、メンバーに対して自己の内面が表出できることを表していると考え、『自己の内面の伝達可能性』とした。第３因子は、「６ほとんどの場合、私はメンバーとうまくやっていけます」「７グループの人たちは、私の言うことを受け入れてくれると思います」「19メンバーとの付き合いで、自分をうまくコントロールすることができます」などに因子負荷量が高く、グループメンバーに受け入れられていることと、これによって前向きな自分が表出できることから得られる自信を表す内容であると考え、『被受容による人間関係への自信』とした。

⑵　既知集団妥当性の結果

サークル活動に参加している子育て中の母親とペアレンティング・プログラムを終了した母親の２群に分け、各下位尺度得点についてｔ検定を行った。サークル活動に参加している子育て中の母親は113人、ペアレンティング・プログラムを終了した母親は55人であった。第１因子『グループメンバーへの安心と信頼』の得点は、サークル活動に参加している子育て中の母親のほうがペアレンティング・プログラムを終了した母親より有意に高かった（p=　.038、ｔ=2.108、自由度166）。第２因子『自己の内面の伝達可能性』については有意差を認めなかった（p=　.164、ｔ=1.404、自由度166）。第３因子『被受容による人間関係への自信』についても、有意差は認めなかった（p=.072、ｔ=1.812、自由度166）。モデルの適合度を示すRMSEAは.069であった。

４）信頼性の検討

各下位尺度のクロンバックのα係数を算出したところ、第１因子『グループメンバーへの安心と信頼』は.95であり、第２因子『自己の内面の伝達可能性』は.90、第３因子『被受容による人間関係への自信』は.88と高い信頼性係数を得た。

また、修正済み項目合計相関は第１因子で.58～.85、第２因子で.66～.78、第３因子で.50～.83と高い相関を得た。

考　　察

１．尺度項目の構成概念について

当初は７つの下位尺度を設定したが、因子分析では３因子となった。２つの下位尺度「被受容感」と「人間関係についての自信」として設定した項目がまとまった形となり、第３因子『被受容による人間関係への自信』となった。この結果は、母親グループにおいては、メンバーからの被受容感が人間関係への自信をもたらしているといえると考える。また、「安心感・信頼感」と「対人的な魅力」「内面が伝達できること」は第１因子『グループメンバーへの安心と信頼』と第２因子『自己の内面の伝達可能性』に分かれた。このことは、「グループの中で話し合うときは、自分の考えを正直に言う」ことはできても、『メンバーへの安心と信頼』があるからといって、メンバーに『自己の内面を伝えられる』とは限らず、「メンバーから離れたくない」「メンバーと一緒に興味に関することをしたい」というような、メンバーに対する親密性も必要になるのではないかと考える。「自己理解」「被理解」とした２つの下位尺度は、第１因子『グループメンバーへの安心と信頼』に含まれた。この項目はいずれも、グループに参加し、メンバーに受け入れられたと感じた成果として配されたと考える。

また、クロンバックのα係数がいずれの因子も高いことから、下位尺度のまとまりは生じたものの、当初各下位尺度に位置付けた項目がばらばらに因子分析後の因子に分かれることはなく、類似性の高い内容を尋ねていたものが同じ因子としてまとまって配置されたと考えられ、設定した項目は測定が可能なものであったと考える。

２．尺度項目の精選について

内容妥当性の検討で、下位概念の位置づけが適切でない可能性が考えられる、研究者の選択がばらついた項目が８項目あった。因子分析で因子負荷量が低かった項目が３項目あり、これらを除外したが、この中に下位概念の位置づけが不明と考えられた項目が２項目（17，22）含まれていた。また、因子負荷量の高値が重複している項目が１つ（９）あった。よって、除外された項目は、「グループによる被サポート感」を表現する内容として妥当でなかったといえる。しかし、下位概念の位置づけが不明と考えられた８項目のうち、５項目は残した。その理由は、項目間相関で高すぎる項目がなく、グループによる被サポート感を知るうえで必要と判断したためである。因子分析の結果、これら５項目はすべて第１因子に配置され、因子負荷量も十分得たことから、項目を残したことは支障なかったと考える。

望月らは親支援プログラム（Nobody's Perfect）に参加した母親等にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、仲間同士やグループが力を発

揮するピア・エンパワメントとして、仲間との交流が自己開示を促進したり、参加者には皆子育ての悩みがあるという気付きがある[11]など評価している。今回作成した被サポート感尺度に「11メンバーは私の気持ちを分かってくれると思います」や「23グループに参加すると気づきを与えてもらえます」の項目が『グループメンバーへの安心と信頼』の下位尺度に配置されていることから、グループによりサポートされた効果として量的にも評価できると考える。

3．尺度の信頼性について

本尺度のクロンバックα係数は .88～.95を示し、高い内的整合性が保たれていたことから、信頼性も確保され、本尺度は母親がグループからサポートを得ていると感じられる要素が明らかとなった。

4．グループによる被サポート感尺度の活用可能性について

既知集団妥当性の検討において、第1因子『グループメンバーへの安心と信頼』の得点が、サークル活動に参加している子育て中の母親のほうがペアレンティング・プログラムを終了した母親より有意に高かった。その要因として、育児不安・育児困難感・虐待に悩む母親が集まっていることが予測されるグループの場合、自分に自信がなかったり、ダメな母親であると感じているものが多く、悩みをなかなか打ち明けられないことが考えられ、被虐待歴がある場合には、対人関係への影響も考えられる。安心・安全・信頼や内面が伝達できることの意義は大きいと考える。そして、『被受容による人間関係への自信』は、受容されて信頼できるようになるという状況が作られて初めて、次の段階としての自己の成長や発達につながっていくのではないかと考えられる。

エンカウンター・グループの効果としてあげられているものの中に「自己存在感」「他者内面の理解」「自己一致」「他者受容」「自己信頼」がある[12]。しかし、本尺度の項目内容は、参加者にとっての被サポート感は把握できるものの、グループ活動によってサポートされることにより得られる効果として考えていた、「相互理解」に関しては、設定した項目も少なく、自分が受け入れられていることを感じ、他者の内面も理解できるようになったかといった側面は十分に評価しきれなかったという点は課題である。

5．本研究の限界

本研究では、基準関連妥当性の検証や再テスト法を実施していない。活用可能性を高めるには、基準関連妥当性にかかわる項目の調査や再テスト法を実施し、尺度の妥当性と安定性を確保していく必要がある。

結　論

母親のグループにおいて、グループメンバーからサポートが得られているかを明らかにするために、「グループによる被サポート感尺度」を作成し、信頼性・妥当性を検討した。本尺度は第1因子『グループメンバーへの安心と信頼』、第2因子『自己の内面の伝達可能性』、第3因子『被受容による人間関係への自信』の3下位尺度22項目で構成された。内容妥当性、構成概念妥当性、信頼性を検証し、信頼性・妥当性が確認できた。作成した「グループによる被サポート感尺度」は子育て中の母親グループの評価として活用可能性があるといえる。

謝　辞

研究の主旨をご理解いただき、多大なるご協力をいただきました、関係各所ならびに、本研究にご協力いただきましたお母様方に深く感謝いたします。

なお、本研究の内容の一部は、第57回小児保健学会にて発表した。

本研究は、石川県立看護大学に提出した学位論文（2009年度）を加筆・修正したものである。

利益相反について

本研究において利益相反に関する開示事項はありません。

引用文献

1）厚生労働省：平成20年度版厚生労働白書，［オンライン，https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/08/dl/14.pdf］，9．5．2009

2）中板育美：母と子の育児グループによる虐待予防の試み，保健婦雑誌，54(8)，631－636，1998

3）石川到覚：子育てグループと専門職の距離－ソーシャルワークの視点から－，助産雑誌，58(7)，43－47，2004

4）小長井春雄：「子育てピア」と専門職のための支援者養成プログラムを実施して－今専門職に求められていること－，助産雑誌，58(7)，37－42，2004

5）前原邦江，大月恵理子，林ひろみ，他：乳児

をもつ家族への育児支援プログラムの開発，千葉看護学会誌，13(2)，10－18，2007
6）清水嘉子，関水しのぶ，遠藤俊子，他：母親の育児幸福感を高めるプログラムの実施と評価，日本看護科学会誌，29(1)，41－50，2009
7）柴田俊一：親教育プログラムNobody's Perfectの短期効果について，子どもの虐待とネグレクト，8(1)，114－118，2006
8）村家朋子，山田恵子，矢野純子，他：虐待予防事業「マザーグループ」の評価と有効性に関する研究，子どもの虐待とネグレクト，9(2)，225－235，2007
9）アーヴィン・D・ヤーロム，ソフィア・ヴィノグラードフ：グループセラピーで効果をもたらす因子とは，川室優訳，グループサイコセラピー－ヤーロムの精神集団療法の手引き－，金剛出版，23－32，東京，1991
10）出口拓彦，吉田俊和：自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響-被開示者における対人的志向性の効果に関する縦断的研究，対人社会心理学研究，4，51－56，2004
11）望月由妃子，杉澤悠圭，田中笑子，他：親支援プログラム（Nobody's Perfect）を活用した虐待予防事業の評価と今後の課題に関する研究，小児保健研究，72（5），737－744，2013
12）松浦光和：ロジャーズ（1970）の考え方に基づいたエンカウンター・グループ効果測定尺度の構成，人間性心理学研究，18(2)，139－151，2000